

## J.S.バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

— 第10番 ト長調 BWV 796 —

藤 本 逸 子

### はじめに

この小論に先立ち、「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』<sup>1)</sup>の楽曲分析と演奏解釈」<sup>2)</sup>と題し、「第1番ハ長調 BWV 772<sup>3)</sup>」から「第11番ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番イ長調 BWV 783」から「第15番ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番ハ長調 BWV 787」から「第9番ヘ短調 BWV 795」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」から「同第27号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第10番ト長調 BWV 796」を取り上げたものである。

### 楽曲分析と演奏解釈

「Sinfonia 10」は、33小節で構成された曲である。テーマは12回現れ、ストレッタはない。テーマと対旋律という構造ではなく、テーマの断片やテーマの変奏がテーマに添えられた形で作り上げられている。「W.F.バッハのための小曲集」<sup>4)</sup>において、この「Sinfonia 10」にあたるのは、53番めの曲で「Fantasia 5」(BWV 796)と題されている。双方には、表Iに示したような多くの違いが見られる。特に、臨時記号の細かい違いが多い。そこに、「Sinfonia 10」として世に出すにあたり、推敲を重ねたことが伺われる。

1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J.S.バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「 」に入れて表わす。

3) BWV=Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミダーによるJ.S.バッハ作品総目録番号。

4) 「W.F.バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

表I 「Sinfonia 10」と「Fantasia 5」の相違箇所

Sinfonia 10	Fantasia 5
⑤ <sup>5)</sup> 中声3拍め A音 <sup>6)</sup> H音 C音 A音	⑤ 中声3拍め A音 H音 Cis音 A音
⑥ 上声2拍め E音 D音 C音 H音	⑥ 上声2拍め E音 D音 Cis音 H音
⑮ 上声2拍め C音 D音 E音 Fis音	⑮ 上声2拍め Cis音 Dis音 E音 Fis音
⑮ 中声2拍め 八分音符 A音 C音	⑮ 中声2拍め 四分音符 A音
⑮ 中声3拍め 八分音符 H音 E音	⑮ 中声3拍め 八分休符 八分音符 E音
⑮ 下声2拍め 八分音符 A音 Dis音	⑮ 下声2拍め 八分音符 A音 十六分音符 G音 Fis音
⑳ 上声2拍め H音 (前音からのタイあり) E音	⑳ 上声2拍め D音 (タイなし) E音
㉑ 下声2拍め H音 A音 H音 C音	㉑ 下声2拍め H音 Ais音 H音 Cis音
㉑ 下声3拍め D音 E音 F音 C音	㉑ 下声3拍め D音 E音 F音 G音
㉒ 下声1拍め D音 E音 D音 C音	㉒ 下声1拍め F音 E音 D音 C音
㉓ 下声2拍め A音 G音 A音 H音	㉓ 下声2拍め A音 Gis音 A音 H音
㉓ 下声3拍め C音 D音 E音 H音	㉓ 下声3拍め C音 D音 E音 Fis音
㉔ 下声1拍め C音 D音 C音 H音	㉔ 下声1拍め E音 D音 C音 H音
㉗ 上声1拍め 四分音符 G音 (前音からのタイなし)	㉗ 上声1拍め 二分音符 G音 (前音からのタイあり)
㉗ 上声2拍め G音 (前音からのタイあり) H音 A音 G音	㉗ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 G音
㉘ 上声1拍め 四分音符 F音	㉘ 上声1拍め 二分音符 F音
㉘ 上声2拍め F音 (前音からのタイあり) A音 G音 F音	㉘ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 F音
㉙ 上声1拍め 四分音符 E音 (前音からのタイあり)	㉙ 上声1拍め 二分音符 E音 (前音からのタイあり)
㉙ 上声2拍め E音 (前音からのタイあり) G音 Fis音 E音	㉙ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 E音
㉚ 上声1拍め 四分音符 D音 (前音からのタイあり)	㉚ 上声1拍め 二分音符 D音 (前音からのタイあり)
㉚ 上声2拍め D音 (前音からのタイあり) F音 E音 D音	㉚ 上声2拍め 前拍から続く二分音符 D音
㉜ 下声1拍め C音 A音 H音 C音	㉜ 下声1拍め 八分音符 C音 A音
㉝ 終止線上にフェルマータ	㉝ 付点二分音符上にフェルマータ

5) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例：第4小節め→④，第3小節めから第10小節め→③~⑩。

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例：変ロ音→B音，嬰へ音→Fis音。

## 楽 曲 分 析（譜 1<sup>7)</sup> 参照）

この曲は、四つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	①～⑩ (10)	第2部	⑪～⑲ (9)
主 題	①～② (2)	主 題	⑪～⑫ (2)
主 題	③～④ (2)	主 題	⑬～⑭ (2)
主 題	⑤～⑥ (2)	主 題	⑮～⑯ (2)
主 題	⑦～⑧ (2)	間奏2	⑰～⑲ (3)
間奏1	⑨～⑩ (2)		
第3部	⑳～㉕ (6)	第4部	㉖～㉓ (8)
主 題	㉖～㉗ (2)	主 題	㉖～㉗ (2)
主 題	㉘～㉙ (2)	間奏3	㉘～㉚ (3)
主 題	㉛～㉜ (2)	主 題	㉛～㉜ (3)

## 各部分における楽曲分析

### 第1部

#### 主 題

- ①～②・①～②上声部には、八分休符と付点八分音符からなる要素（a1）と、順次上行する四つの十六分音符からなる要素（b）と、2度上行・3度下行・4度上行とジグザグ動く四つの十六分音符からなる要素（c）と、（b）の反行形を二つ連ねた（ $q \times 2$ ）と、（b）の反行形（q）の最後が2度上行した形（q1）からなるテーマ（T）がある。
- ・（a）と（b）は、2度下行する形で繋がっている。以下、（b）と（c）は2度上行、（c）と（ $q \times 2$ ）は2度下行、（ $q \times 2$ ）と（q1）は7度跳躍上行する形でそれぞれ繋がっている。
  - ・（a）は、（a1）で出現するのは3回だけで、他の9回は変形している。その変形によって、（a）と（b）が2度上行する形で繋がっているところもある。
  - ・②の（q）の最後は、2度上行（q1）し、主調のG dur<sup>8)</sup>に（T）を収めているが、（q）の最後はいつも2度上行するわけではなく、（q）のままで順次下行したり、跳躍進行したりと変化している。
  - ・①～②中声部は、2小節とも全休符である。

7) この小論における「Sinfonia 10」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext（Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972）を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大文字は長調、小文字は短調を表わす。例、ハ長調→C dur あるいはC:, イ短調→a moll あるいはa:.

- ・①～②下声部は、①でG durの主和音の和声音を鳴らした後、カデンツ（k）のバスらしい動きをしている。

## 主 題

- ③～④・③～④上声部は、中声部の（T）の（b）にそって、6度上で（b）を鳴らし、D durの（k）に入っている。
- ・③～④中声部には、主調の属調であるD durで（T）がある。
- ・③～④下声部は、D durの下属音と第三音を鳴らした後で、（k）に入る。

## 主 題

- ⑤～⑥・⑤～⑥上声部には、D durの（T）がある。この（a）は、四分音符と十六分音符がタイで結ばれた形（a2）に変化している。（T）の終わりは、そのまま順次下行し（q）となっている。
- ・⑤～⑥中声部は、（b）が二つ並んだ（b×2）・（c）・（q×2）から一つ置きに音を拾った（q×2'）と続き、（q×2'）の最後の音から、6度跳躍上行してC音に入り、G durへの転調を確実なものとしている。この中声部は、（b×2）の後半から（c）・（q×2'）と、上声部の（T）の音形に沿って動き、6度下で（T）を支えている。
- ・⑤～⑥下声部は、休止している。

## 主 題

- ⑦～⑧・⑦～⑧上声部は、G durの属音・主音・導音を、四分音符とそれに続く音符をタイで結んで鳴らしている。これら三つの音の間を（b）と（q×2'）が繋いでいる。この（b）は、下声部の（T）の（b）に沿って動き、6度上の音を鳴らしている。（q×2'）は、同じく下声部の（T）の（q×2）に沿って動き、3度上の音を鳴らしている。
- ・⑦～⑧中声部は、G durの第三音・下属音を、四分音符と二分音符とで、それぞれに続く音符をタイで結んで鳴らしている。この二つの音を（q1）・（c）・（q）で挟んでいる。（c）は、上声部の（b）と同じように、下声部の（T）の（c）に沿って動き、6度上の音を鳴らしている。（q）も、上声部の（q×2'）のように、下声部の（T）の（q2）に沿って動き、3度上の音を鳴らしている。
- ・⑦～⑧下声部には、G durの（T）がある。この（T）の終わりの（q）は、4度跳躍上行（q2）している。

## 間奏1

- ⑨～⑩・⑨～⑩上声部は、直前の⑧の音形をそのまま2度下へ、2度下へと2回ゼクエンツしている。その間に、G durからe mollに転調してE音に至り、第1部を終了している。
- ・⑨～⑩中声部も、上声部同様、⑧の音形をそのまま2度下へ、2度下へと2回ゼクエンツし、e mollの第3音に至り、第1部を終止している。
- ・⑨～⑩下声部は、⑧の（T）後半を上声と中声部同様に2回ゼクエンツしている。

すなわち（T）後半が、そのまま間奏となっているのである。ゼクエンツの最後は、e mollの主音を響かせ、第1部を終止させている。

## 第2部

### 主 題

- ⑪～⑫・⑪～⑫上声部は、e mollの主音を響かせたあとは、D音・C音・D音と動いて、a mollへの転調へと導いている。
- ・⑪～⑫中声部には、e mollで始まりa mollに至る（T）がある。この（T）の出だしは、四つの十六分音符で順次下行している。これは、要素としては、全く（q）と同じであるが、（a）の変形の一つとして、（a3）と記すことにする。
  - ・⑪～⑫下声部は、⑪の2拍めの（b）以外は、自由な動きで、a mollへの転調を促している。この下声部の（b）は、中声部の（T）の（b）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。

### 主 題

- ⑬～⑭・⑬～⑭上声部には、a mollの（T）がある。この（T）の出だしも、全く（q）と同じであるが、⑪～⑫の（T）同様、（a）の変形の一つとして、（a3）と記すことにする。
- ・⑬～⑭中声部は、a mollの属音と下属音を付点二分音符で響かせている。
  - ・⑬～⑭下声部は、自由な動きで、a mollを和声的に支えている。

### 主 題

- ⑮～⑯・⑮～⑯上声部は、a mollで始まりe mollに至る（T）がある。この（T）の出だしは、四つの十六分音符で順次上行しており、全く（b）そのものであるが、⑪～⑭同様、（a）の変形の一つとして、（a4）と記すことにする。この（T）の終わりは（q2）となっている。ここで4度跳躍上行することによって、e mollの転調は安定性を得ずに、h mollへの転調へと向かうことになる。
- ・⑮～⑯中声部は、⑮は自由に動いているが、⑯では⑧の上声部と同様の役目を負い（ $q \times 2'$ ）が上声部の（T）の（ $q \times 2$ ）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。
  - ・⑮～⑯下声部も、中声部同様、⑮は自由に動いているが、⑯では⑧の中声部と同様の役目を負い（q）が上声部の（T）の（q2）に沿って動き、6度下の音を鳴らしている。

### 間奏2

- ⑰～⑱・⑰～⑱の間奏2は、⑨～⑩の間奏1同様、直前の⑯の音形を、そのまま2度下へゼクエンツすることで成り立っている。間奏1では、ゼクエンツが2回に留まっているが、間奏2では3回行われている。また、間奏1と間奏2では、声部も入れ替わっており、間奏1の上声部は間奏2では中声部へ、中声部は下声部へ、下声部は上声部へと、それぞれ移っている。この間奏2の間に、e mollからh mollへ

転調している。3回のゼクエンツを終え、h mollの主和音に至ったところで、第2部が終了している。

### 第3部

#### 主 題

- ⑳～㉑・㉑～㉒上声部は、(q)の後、h mollの主音と導音を鳴らしている。
- ・㉑～㉒中声部には、h mollの(T)がある。この(T)は、(a2)で始まり、(q1)で終わっている。
- ・㉑～㉒下声部は、h mollの第三音・第六音・属音を鳴らした後、h mollの(k)のバスの動きをしている。

#### 主 題

- ㉒～㉓・㉒～㉓上声部は、h mollの主音の後、(q)の音価を2倍の長さにした(q×)を二つ置いている。
- ・㉒～㉓中声部は、(b)の後、上声部の(q×)に沿って3度下で(q×)を鳴らしてGis音に入り、a mollへの転調を促している。
- ・㉒～㉓下声部には、h mollで始まり、a mollに至る(T)がある。この(T)は、(a2)で始まり、(q)で終わっている。また、この(T)の(c)は、2度上行の後、4度下行・2度上行とジグザグに動く音程の幅が変化(c')している。

#### 主 題

- ㉔～㉕・㉔～㉕は、3声とも㉒～㉓を、2度下でゼクエンツしている。ただし、上声部は、㉒より2度高い音で始まる。従って、㉒では最初の音から(q×)に4度跳躍上行して繋がっているが、㉔では2度順次上行して繋がっている。
- ・㉔～㉕の下声部は、㉒～㉓の(T)をゼクエンツすることになる。㉔～㉕の(T)は、a mollで始まりG durに至っている。
- ・G durの主和音を鳴らし、第3部を終了している。

### 第4部

#### 主 題

- ㉖～㉗・㉖～㉗上声部は、(q)を挟んで、G durの主音と導音を鳴らしている。この主音は、㉖と㉗で独立した四分音符で記されているが、タイで結ばれて然るべきものと思われる。
- ・㉖～㉗中声部には、G durの(T)がある。この(T)は(a4)で始まり、4度跳躍上行する(q2)で終わっている。(T)の最後を4度跳躍上行させることで、G durは不安定になり、転調へ向かう動きとなっている。
- ・㉖～㉗下声部は、(q×2')の反行形(b×2')と(c)の音価を2倍の長さにした(C×)と(q)が置かれている。

## 間奏3

- ⑳～㉔・㉕～㉗は、3声とも直前の㉖の音形をそのまま2度下へゼクエンツすることで成り立っている。ゼクエンツは3回行われている。音形は違うが、間奏1と間奏2と同様の作りとなっている。この間奏の中で、C durとG durの間をめまぐるしく行き来するような転調している。

## 主 題

- ㉘～㉚・㉛～㉜上声部には、G durで最後の(T)がある。この(T)は、(a3)に始まり、(q1)に終わっている。この終わりが、そのまま曲の終止となっている。
- ・㉛～㉜中声部は、四分休符の後、G durの主音・導音・主音の順に音を響かせている。最後の主音が、曲の終止音となる。
  - ・㉛～㉜下声部は、(q)・(q1)・(c)・(b)と続き、(k)に入る。(k)は、いかにもG durのバスらしい動きをして、曲を終止させている。

## 演奏解釈 (譜2参照)

## テンポ

テンポに関して、諸校訂版<sup>9)</sup>は、表Ⅱのような指示をしている。

表Ⅱ 諸校訂版における「Sinfonia 10」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bicshoff	Allegro ♩ = 100
Ferruccio Busoni	Allegro deciso
Alfredo Casella	Allegro veloce
S.A.Durand	Allegretto
James Friskin	Allegro brillante ♩ = 100
Vilem Kurz	Allegro
Wm.Mason	Allegro moderato
G.E.Moroni	Allegretto ♩ = 100
Bruno Mugellini	Allegro giusto ♩ = 96
Julius Rötgen	Allegro ♩ = 92
井口基成	Allegro
千倉八郎	Allegro ♩ = 96

また、内外11人の演奏時間は、表Ⅲのとおりである。

表Ⅲ 諸演奏家における「Sinfonia 10」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	0'59"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	0'58"
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	0'59"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1'07"
András Schiff	1982~83年	ピアノ	1'04"
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	1'13"
田村 宏	不明	ピアノ	1'02"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1'09"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1'18"
Helmut Walch	1961年	チェンバロ	1'24"
Don Dorsey	1985年	シンセサイザー	1'00"

9) 各校訂版及び、各CDの出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと。



表Ⅱの校訂版の指示に見るように、どの演奏もゆっくりしたテンポではない。しかし、ヴェルヒヤの演奏時間は、エッセンバッハの約1.4倍の長さである。ドーシーは、シンセサイザーを、オルゴールをイメージさせるような音色に設定し、シンプルにまとめている。それに対して、高橋悠治は、装飾音を多用し、華やかな演奏を行っている。

筆書は、十六分音符の美しい流れを大切にし、少し落ち着いた雰囲気を表現をしたいので、「Allegretto ♩=88」というテンポをとる。

## アーティキュレーション

表Ⅲにあげた演奏では、十六分音符は、皆レガート奏法であった。八分音符は、二つずつレガートで結ぶ演奏、スタッカート演奏、ノンレガート演奏、レガート演奏と様々であった。

筆者は、十六分音符はレガート、八分音符はノンレガート、四分音符は充分テヌートしたノンレガートで奏す。区切りを感じたいところには、譜2に|を記した。

## 装飾音

「Sinfonia 10」(BWV 796)の原典版には、装飾音は付されていない。表Ⅲにあげた演奏では、上記の高橋だけでなく、シェフも装飾音を付した演奏をしている。

筆者は、装飾音を付す必要性を感じない。

## 各部分における演奏解釈

- ①～②・堂々とした*mf*で、明るく健全に始める。
- ・上声部の(T)は、下声部の安定したバスの動きに乗って、(T)のクライマックスである②1拍めのE音に向かって*cresc.*する。
  - ・(T)クライマックスのE音を少々テヌートした後、順次下行する音に沿って、おだやかに*dim.*する。
  - ・②3拍めの(q1)を美しく歌い上げて、③1拍めのH音に入り、(T)を納める。
  - ・下声部は、四分音符を豊かに響かせて、上声部の(T)を支える。
  - ・②から③にかけての下声部は、特に(k)の動きを意識する。
- ③～④・属調であるD durの(T)は、中声部に現れているので、同じ*mf*ではあるが、①～②より少し控えた表現となる。
- ・上声部も下声部も、d durの終止感を意識し、(k)を響かせる。
- ⑤～⑥・上声部の(T)は、*f*で上行・下行に沿って*cresc.*と*dim.*をする。
- ・上声部の⑥1拍めのH音は、第1部のクライマックスとして、高らかに歌い上げる。
  - ・中声部は、上声部(T)の6度下で、影のように寄り添って歌いながら(T)を支える。
- ⑦～⑧・下声部の(T)は、音の太さを意識して、おおらかに*cresc.*と*dim.*をする。

- ・上声部と中声部は、両声部の間を交互に出現する (q)・(b)・(c)・(q × 2')・(q) の掛け合いを楽しむ。
- ⑨～⑩・この間奏は、ゼクエンツの一塊りの中で少々 *dim.* をしながら、1小節毎にテラス状に *dim.* し、第1部を *mP* で終える。
  - ・下声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、⑧の音も加えて、E音・D音・C音と音が動いていくことを意識する。
- ⑪～⑫・第2部は、*mP* で始める。
  - ・中声部の (T) は、*moll*らしさと転調による調の不安定さを意識し、不安感を出す。
  - ・上声部と下声部は、比較的自由的な動きをしているので、そのリズムを生かすようにする。
- ⑬～⑭・⑪～⑫より少し強くなって、*mf* となる。
  - ・上声部の (T) は、*moll*ではあるが、上に昇っていく予感、成長の予感を表現する。
  - ・中声部は、どっしり安定した音を響かせる。
  - ・下声部は、⑬～⑭にしか出現しない特徴的なリズムを楽しむようにする。
- ⑮～⑯・全曲中最大のクライマックスが出現するところである。*f* で奏す。
  - ・上声部の (T) は、全曲中最大のクライマックスである⑯1拍めのH音に向かって、豊かに *cresc.* する。クライマックス後は、*dim.* するものの、あまり納めすぎないようにして、次の間奏に続いていくようにする。
  - ・中声部と下声部は、⑮では、(T) に沿って *cresc.* する。⑯では、次の間奏にゼクエンツで続いていくことを視野に入れて、*dim.* する
- ⑰～⑱・この間奏の間に、*f* から *mP* まで *dim.* して、第2部を終わる。
  - ・⑨～⑩の間奏と同じように、ゼクエンツの一塊りの中で少々 *dim.* をしながら、1小節毎にテラス状に *dim.* する。
  - ・⑨～⑩同様、上声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、⑯と⑲の音も加えて、C音・H音・A音・G音・Fis音と音が動いていくことを意識する。
- ⑳～㉑・第3部は、*mP* で始まる。
  - ・(T) が、中声部に現れ、上声部の動きも下声部の動きも③～④に似ている。華々しく主張するような表現はしないが、安定感のあるどっしりした存在感を出したい。
- ㉒～㉓・*P* で、内面的な美しさを出したい。
  - ・下声部の (T) は、(c) が (c') に変化することによって、派手やかさがなくなり、より内面的な表現となっている。おだやかに *cresc.* と *dim.* をしたい。
  - ・上声部と中声部は、㉒では両声協力が3度の重音で下行し、㉓では中声部の響きの上で上声部が静かにゆったり下行している。これらの動きを静謐な中で行い、下声部の内面性を引き立たせるようにする。
- ㉔～㉕・ここも *P* で、奏す。
  - ・㉒～㉓の動きを2度下で、*G dur* で鳴らすことによって、希望に向かう静かだが力強いエネルギーを感じる。単に、*P* で奏すのではなく、内に秘めた強さを表現し

て、第3部を終える。

- ②6～②7
- ・②2～②5で内に秘めていたエネルギーを外に放出するように*cresc.*して*f*に至らせる。
  - ・中声部の(T)は、クライマックスの②7 1拍めのE音に向かって伸び伸びと*cresc.*する。
  - ・下声部も、(T)に沿って、*cresc.*する。
  - ・②7は、クライマックス後、*dim.*をするが、⑧や⑩同様、次の間奏のゼクエンツを視野に入れて、納めすぎないようにする。
- ②8～③0
- ・この間奏の間に、*f*から*mf*まで*dim.*する。
  - ・前出の二つの間奏と同じように、ゼクエンツの一塊りの中で少々*dim.*をしながら、1小節毎にテラス状に*dim.*する。
  - ・⑨～⑩及び⑬～⑭同様、中声部の各小節の最初の音を少々テヌートして、②7の音も加えて、E音・D音・C音・H音と音が動いていくことを意識する。
- ③1～③3
- ・最後の(T)のクライマックスである③2 1拍めのE音に向かって、堂々と惜しみなく*cresc.*する。
  - ・上声部の(T)は、クライマックス後も*dim.*せず、厚みを増して最後のH音に向かう。テンポは緩めず、最後の(9 1)を充分テヌートして曲を閉じる。
  - ・中声部は、G durの主音・導音・主音を豊かに響かせ、安定した終止に上声部と下声部を導く。
  - ・下声部は、上声部に反行する動きをして幅広い響きと緊張を与え、その後に安定した(k)に入って、曲を閉じている。上声部同様、*dim.*せず、テンポも緩めず、最後の(k)を充分テヌートし、深い趣を持った響きで曲を終える。

## おわりに

「Sinfonia 10」は、伸び伸びと素直に動き回る、爽やかな少年を感じさせる愛らしい曲である。十六分音符による音階を多用したテーマという意味で、インヴェンションの11番・シンフォニアの1番に似ている。特に、インヴェンションの11番とは、7度跳躍上行するところもよく似ている。このような類似から、これら3曲は同時期に作曲された可能性も感じられる。

### 【追】

豊橋創造大学短期大学部研究紀要第27号に寄稿した「J.S.バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈 ー第9番 へ短調 BWV 795ー」に、二箇所、誤りがありましたので、次のように訂正させていただきます。ご指摘くださったNH氏に、心より感謝申し上げます。

- ・ 60ページ下から8行目

(誤) その間に、f mollからA durに転調している



(正) その間に、f mollからAs durに転調している

- ・ 61ページ上から6行目

(誤) ①～②下声部には、As durで



(正) ⑪～⑫下声部には、As durで

## 参考文献・参考楽譜・参考CD

## \*参考文献

- ・市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
- ・山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

## \*参考楽譜

## 原典版

- ・Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1979)
- ・Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
- ・BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Bärenreiter - Verlag, Kassel 1972)
- ・J.S.BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
- ・BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (C.F.Peters coporation, Frankfurt 1933)
- ・J.S.Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H&Co.,K.G.,Wien 1973)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 角倉一朗校訂(カワイ出版 1983)
- ・バッハ「インヴェンションとシンフォニア」原典版 長岡敏夫編(音楽之友社 1965)

## 校訂版

- ・J.S.BACH 「15 SYMPHONIEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach/M)
- ・BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G.Schirmer, New York 1967)
- ・J.S.BACH 「Dreistimmige Inventionen」Ferruccio Busoni (Breitkopf&Haltel Weisbaden)
- ・BACH 「INVENTIONI TRE VOCI」Alfredo Casella (Edizioni Curci Milano 1946)
- ・J.S.BACH 「Inventions à 2 et 3 voix」Durand S.A. (Editions Musicales, Paris 1957)
- ・J.S.BACH 「Three-Part Inventions」James Friskin (J.Fischer & Bro. Belwin Mills 1970)
- ・JOH.SEB.BACH 「15 Dreistimmige Inventionen (Sinfonien)」Alfred Kreutz (B.Schott's Sohnen Mainz 1950)
- ・BACH 「DVOUHLASÉ INVENCE A TŘÍHLASÉ SINFONIE」Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
- ・BACH 「Three-Part Inventions」WM.Mason (G.Schirmer Inc New York 1967)
- ・BACH 「15 INVENTIONI A 3VOCI」G.E.Moroni (Carisch S.p.a. Milano 1981)
- ・BACH 「INVENTIONI A TRE VOCI」Bruno Mugellini (Ricordi 1983)
- ・JOH.SEB.BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
- ・バッハ「二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」バッハ集4 井口基成(春秋社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション」(音楽之友社 1955)
- ・バッハ「インヴェンション」全音楽譜出版社出版部編(全音楽譜出版社)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア」ピアノ指導講座7 千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・バッハ「インヴェンション&シンフォニア 解釈と奏法」千倉八郎編(日音楽譜出版社 1983)
- ・J.S.バッハ「インヴェンションとシンフォニア」Hans Bischoff 角倉一朗訳(全音楽譜出版社 1972)

## \*参考CD

- ・Aldo Ciccolini (Piano) 「J.S.BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
- ・Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)
- ・Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)
- ・Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J.S.Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)
- ・András Schiff (Piano) 1985 「J.S.BACH 2&3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)
- ・高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
- ・田村宏 (Piano) 1989 「J.S.バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
- ・Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J.S.BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)
- ・Gustav Leonhardt (Cembalo) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)
- ・Helmut Walcha (Ammer-cembalo) 1961 「J.S.バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)

譜1 「Sinfonia 10」 BWV 796 ①~③③ (楽曲分析)

第1部  
主題

G:→D:

主題 T 主題

4 k q x 2 q1 T a2 b c q x 2 q

D:→G: k b x 2 c q x 2'

7 主題 b q x 2' 間奏1 q x 2'

G: a1 q1 b c q x 2 q2 q x 2 q2

10 q x 2' q a3 (q) b c T q x 2 q

G:→e:→a: b

13 主題 T 主題 T

a3 (q) b c a4 (q) b c

a:→e:



間奏2

16  $q \times 2$   $q2$   $q \times 2$   $q2$   $q \times 2$   $q2$

e: → h:

q q q

第3部 主題

19  $q \times 2$   $q2$   $q$   $q \times 2$   $q$

h:

q q k k

主題

22  $q \times$   $q \times$   $q \times 2$   $q$   $q \times$   $q \times$

h: → a: → G:

a2 b c' 2° 4° T b c T

第4部 主題

25  $q \times$   $q$   $q \times 2$   $q2$   $q$   $q2$   $q$

G: → C:

a4 (b) T c b x 2' c x q

間奏3

28  $q$   $q$   $q$   $q$   $q$   $q$

C: → G:

4° q q q q q

主題

31  $q$   $q1$   $q \times 2$   $q1$

G:

a3 (q) b k q

譜 2 「Sinfonia 10」 BWV 796 ①~③③ (演奏解釈)

Allegretto ♩ = 88

① テーマのクライマックス

mf

④ 第1部最大のクライマックス

f

⑦ dim.

⑩ mp

⑬ mf f



全曲最大のクライマックス

Musical score for measures 16-18. The piece is in G major and 3/4 time. Measure 16 is marked with a box containing the number 16. The dynamics are *dim.* (diminuendo). The right hand features a complex sixteenth-note pattern, while the left hand provides a steady eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 19-21. Measure 19 is marked with a box containing the number 19. The dynamics are *mp* (mezzo-piano). The right hand continues with intricate sixteenth-note figures, and the left hand maintains its rhythmic accompaniment.

Musical score for measures 22-24. Measure 22 is marked with a box containing the number 22. The dynamics are *p* (piano). The right hand has a more active role with sixteenth-note runs, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 25-27. Measure 25 is marked with a box containing the number 25. The dynamics are *f* (forte). The right hand features a prominent sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

Musical score for measures 28-30. Measure 28 is marked with a box containing the number 28. The dynamics are *dim.* (diminuendo). The right hand has a sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment.

最後のクライマックス

Musical score for measures 31-33. Measure 31 is marked with a box containing the number 31. The dynamics are *mf* (mezzo-forte) and *f* (forte). The right hand features a sixteenth-note melody, and the left hand continues with eighth-note accompaniment, ending with a final chord.